隣家の女の子

稗田東夷人

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
隣家の女の子

【Ｎコード】
Ｎ３９０９Ｅ

【作者名】
稗田東夷人

【あらすじ】
『超短編小説企画参加作品』。家庭のお仕置きもの。おねしょには線香でお仕置きって、怠け心で起きたくないと粘ってるうちに、漏らしてしまうのだと、信じてる人は多かったんです。本当は逆効果なんですが。お仕置きにおびえて寝たら、神経が変調きたして大人だってしてします。

作りすぎたカレーを持って隣家の引き戸を開けた寛一の目の前で、壁に向かって立たされた千津子がショーツを膝まで下ろされてテニスのラケットで母に尻を打たれていた。こうして千津子のむき出しの下半身を見るのはスカートめくりの悪戯をして以来だった。まだ小学生だった千津子がショーツを履いていなかった理由を寛一は知っている。

ショーツも履かずにいたのを寛一に知られて、千津子はスカートめくりを怒るどころかべそをかいてしまった。ばつが悪くなって慰める寛一に千津子が打ち明けたのは母の折檻だった。おねしょをすると罰として女の子の大事なところにお仕置きをされるのだと千津子は言った。その痕が布と擦れて痛くてショーツを履けないでいた千津子だった。来年は高学年というのにおねしょ癖が抜けないのは千津子の母の言うように怠け心があって起きないわけではない。むしろ行き過ぎたスパルタ式が千津子の睡眠を狂わせているのだった。

翌日、おねしょの布団が干してあるのを寛一は見つけた。わざわざ道に面したところに干すのは千津子を辱めるためで、これもお仕置の内だった。休日に家にいると親が勉強しろと煩いので、外に出た寛一は千津子の母の苛立った叱責の声を聞いた。千鶴子が言っていた折檻なのだと気づいたとき寛一は好奇心を抑えられず、そっと門柱の影から中をうかがった。庭に面した縁台の上に下半身を裸にされた千津子が仰向けになっていた。千鶴子は自分から膝を立てて脚を開いた。母の手には火のついた線香が握られていて、それが千津子の股間に押し当てられたとき、寛一は思わず息を呑んだ。小さな千津子の体が痙攣してすすり泣く声が聞こえたとき、寛一は自分のズボンのしたで強張っているものがあるのに気づいた。自分の浅ましさを憎みつつも高揚を押さえきれない寛一はズボンの前を強くつかんだ。小さいとはいえ火傷の痛みが引くまで下着も履けないのは道理だった。

カレー鍋を渡した寛一と千津子が縁台に並んで座って夕方の風にあたっていた。いいタイミングで来てくれたおかげでお仕置きが切

り上げられたと千津子は言った。折檻の理由は期末テストの成績だった。千津子は学年で二十位内を常に維持している秀才だ。これでもまだ不満なのかと寛一はあきれる思いだった。千津子が寛一の肩に額を乗せて小さく鼻をすすった。ひどい折檻を受けた後、千鶴子は大抵こうして泣いた。